

格差なく楽しめるジオパークを目指して —ユニバーサルツーリズムの取り組みに対する実践報告—

Creating a Geopark Accessible and Enjoyable for Everyone -Practical Approaches to Universal Tourism Initiatives-

西尾 建¹, 脇田 浩二²岡本 純也³

Tatsuru Nishio¹, Koji Wakita², and Junya Okamoto³

¹ 山口大学 経済学部観光政策学科, ² 山口大学 地域未来創生センター,

³ 一橋大学大学院 経営管理研究科

¹ Yamaguchi University, Faculty of Economics,

² Yamaguchi University, Community Future Center,

³ Hitotsubashi University, Graduate School of Business Administration

要旨

高齢者や障がい者にとって都心の観光施設や宿泊施設は設備やインフラが整備されているが、アウトドア観光地の場合、アクセスや観光地についてからのインフラが整備されておらず、十分に楽しめないなどの課題は多い。山口県は、自然資源が豊富で多くのアウトドア観光地があるが、高齢者や障がい者にとって十分な設備が整っているとはいえない。本研究では、Mine 秋吉台ジオパークを中心にアウトドア観光におけるユニバーサルな取り組みについて考える。高齢者や障がい者対応の先進事例である、富士見高原リゾートや霧島ジオパーク・ユニバーサルデザインフォーラムでの取り組みの紹介を交えた実践報告からアウトドア観光地でのユニバーサルマーケティングについて考えていく。

1. Mine 秋吉台ジオパークとユニバーサルツーリズム

平成 2015 年 9 月 4 日に美祢市全域が「Mine 秋吉台ジオパーク」として日本ジオパークに登録された。2024 年 10 月 9 日時点で、日本ジオパークに 47 地域が登録されており、そのうち 10 地域が国連教育科学文化機関（ユネスコ）世界ジオパークに登録されている。Mine 秋吉台ジオパークは、2020 年の「白山手取川」（石川県）以来 11 カ所目となる世界ジオパークへの認定を目指しており、2024 年 10 月 9 日には、日本ジオパーク委員会が Mine 秋吉台ジオパークの海洋プレートによって運

ばれてきた石灰岩体が、約 8000 万年分の浅海の環境変化を連続的に記録しており世界的に貴重であるという理由などから、Mine 秋吉台ジオパーク地域をユネスコ世界ジオパークに推薦することを決定している。早ければ 2026 年春にユネスコが認定の可否を正式に決定する見通しである。

「Mine 秋吉台ジオパーク」でのユニバーサル対応のサービスとしては、①車いすの無料貸し出し、②ホームページ上でのマップの提供、③多目的トイレ（身体障がい者用トイレ、乳幼児用トイレ、オストメイト対応）、④各種割引（障がい者手帳割引、訪日外国人旅行者割引）を導入している。

2. 研究の背景：観光庁事業「SDGs による山口県でのスポーツツーリズム」事業のレビューとユニバーサルツーリズム

研究チームによるユニバーサルツーリズムの取り組みのきっかけとなったのは、2020 年から 2 年間、国土交通省観光庁の中核人材育成講座に採択され、「山口県の SDGs によるスポーツ観光講座」を開講したことである。講座の目的は、①山口県内外や海外のスポーツ観光の成功事例を紹介しレビューする、②SDGs の視点から山口県内の自然資源、スポーツ資源を再考する、③アイデアを実現するための異業種間でのネットワークの構築であった。受講生は県内を中心に、自

治体観光担当者、DMO、旅行業、宿泊業、金融機関、地域おこし協力隊、スポーツインストラクターなど、スポーツ観光に携わる多くのステークホルダーであった。1年目の2020年の講座は山口大学だけでなく、長門市、萩市や周防大島でも開催した。受講生に対して実施したSDGsに関する調査によれば、講座を通して意識されたSDGs項目はSDGs⑧「働きがいと経済成長」SDGs⑪「住み続けられるまちづくり」SDGs⑱「パートナーシップ目標を達成しよう」であり、本研究に関わるSDGs⑩「人や国の不平等をなくそう」やSDGs⑱「平和と公正とすべての人に」など、格差に対する意識は低い値となった(西尾、橋本、木寺、鳴尾、2022)。

2年目の講座では、1年目のレビューをふまえて秋吉台を中心にユニバーサル対応に関する内容の講座を企画し、実践も含めた講習会や展示会などを実施した。内容は、①座学の講座とアウトドア車いすの講習会、②秋吉台、秋芳洞での実践、③「スポーツフィールドやまぐちフェスティバル」での展示などであった。

講座修了後のレビューでは、SDGs⑩「人や国の不平等をなくそう」やSDGs⑱「平和と公正とすべての人に」など格差に関しては大幅な意識の改善が見られた。講座の受講により参加者の格差に対する是正の意識が高まったといえよう。

しかしながら、アウトドア観光地においての高齢者、障がい者の利用に関しては、課題は山積である。講座で紹介したHippoCampに関しては、機材の購入、ライセンス講習会の実施や複数の補助要員の確保など導入へのハードルは低くない。全国のアウトドア観光地でのユニバーサル対応を進めるためには、それぞれのジオパークが持つ課題を整理し、それへの対応を考慮しながらデザインする必要がある。

そこで本実践報告では、①全国ジオパークネットワークでの調査、②ユニバーサルデザインの先進事例である富士見高原リゾートでの利用者調査、③ジオパーク全国大会「ユニバーサルデザイン分科会」での議論、④学生のユニバーサルツーリズムの取り組み、⑤霧島ジオパークで企画した車いすイベント(電動車いすと車いす補助器具であるJINRIKIの実装)を紹介しつつ、アウトドア観光地におけるユニバーサル施策の導入について考えていく。

3.1. ジオパークネットワークでのアンケート調査

全国ジオパークネットワークに加盟する地域(46地域)・加盟を希望する地域(9地域)におけるユニバーサル対応の現状を把握するために、2023年9月から12月にかけてアンケート調査を実施した。調査は、日本

ジオパークネットワークのユニバーサルデザインワーキンググループの協力によって実施された。

質問項目は、「健常者」の対応に対しては、外国人、幼児連れファミリー、妊婦、高齢者、そして「障がい者」への対応としては、障がい者全体、肢体不自由者、聴覚障がい者、視覚障がい者、精神障がい者と内部障がい者への対応を7段階尺度で聞いた。さらに「補助具サポート」「人的サポート」「マーケティング対応」「モデルコースの設置状況」「不足している対応」および「ユニバーサルデザインのアイデア」の各項目について聞いた。

調査の結果37地域(回答率67.2%)から回答を得た。対応レベルについては、外国人への対応(M=3.78:SD=.82)、家族連れへの対応(M=4.08:SD=.89)はおおむねよくできている。健常者への対応では、妊婦への対応(M=3.22:SD=1.11)を除き、対応ができているという回答が優性であった。障がい者への対応では、肢体不自由者(M=3.53:SD=1.00)や聴覚障がい者への対応(M=3.08:SD=1.08)は比較的進んでいると言えるが、視覚障がい者(M=2.69:SD=1.04)や精神障がい者、知的障がい者、内部障がい者(M=2.84:SD=1.07)については対応できていないという回答が多かった。

「補助器具」に関して、ほとんどのパークで車いすを準備しているが、アウトドア用車いす「JINRIKI」は2カ所(霧島ジオパーク、洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク)、介助用ベッドは1カ所(桜島・錦江湾ジオパーク)と限られたパークでしか対応していなかった。

「人的対応」に関しては、多言語対応できる日本人スタッフやアプリを活用した外国人対応は進んでいるが、障がい者対応については「車いす対応の福祉タクシー事業者のガイド(霧島ジオパーク・ユニバーサルデザインフォーラム)」や「JINRIKI対応などのユニバーサルデザイン講習会(洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク)」などに限られており、全体としては十分ではないという結果になった。障がい者に対しては、特別支援学校の修学旅行や事前リクエストがある訪問に関しては対応ができているが、急な場合は人的対応が難しいのが現状である。

高齢者や障がい者向けの「モデルコース」に関しては、車いすを想定したコースが設置されている(糸魚川ユネスコ世界ジオパーク、霧島ジオパーク、Mine秋吉台ジオパーク)ところもあるが、設置しているパークは少数である(山口2022;山口2023)。しかしながら、ビジターセンター館内での視覚障がい者向け石の触察やワークショップの実施(筑波山地域ジオパーク)、移動困難者向けVRの整備(栗駒山麓ジオパーク、男

鹿半島大瀧ジオパーク、霧島ジオパーク) など、独自の工夫をしている地域もある。

多くのジオパークが、外国人向け対応はできているが「マーケティング」活動としての情報の発信はできていないというのが現状である。現状としては課題は多いものの、ほとんどのジオパークが、車いすをはじめとする高齢者、障がい者への対応に対する高い問題意識を持っているということも明らかになった。

3.2 富士見高原で来場者への調査と議論

ジオパークの全国アンケート調査からは、受け入れ側の課題が浮かび上がった。つぎに、アウトドア観光地に来る高齢者および障がい者に必要な情報を把握するために、アウトドア観光でのユニバーサル対応の先進事例である長野県の富士見高原リゾートに協力を依頼して、2024年6月から7月にかけて利用者(介助者および同伴者)に対してアンケート調査を実施した(富士見高原リゾート、2024)。来場者に対して「アウトドア観光のフィールドであるジオパークや国立公園などの自然公園ではどのような事前の情報提供があれば助かりますか?」という質問をし、必要と考えられる項目を選んでもらった(選択項目:バリアフリートイレ、段差や路面、活動、サポート内容、貸し出し機器の状況、動画、飲食店)。また、その他自由に必要なことについて回答してもらった。

アンケートの結果20人(障がい別では、肢体障がい15人、精神・知的・発達障がい9人、内部障がい4人:4名は重複)から回答を得ることができた。必要な情報としては、トイレ(19人)、段差(18人)、職員やスタッフのサポート(17人)、飲食店(16人)、休憩所の状況、障がいに対応できるガイド、自然公園へのアクセス(12人)、紹介動画(9人)、貸し出し機材(9人)であった。その他自由回答としては、「地図による情報(トイレ、路面段差、飲食店カフェ)」、「ソフト面(職員のサポートや障がいに対応できるガイド)」と「公共交通機関のアクセス」、「施設内に横になれるスペースがあるか」などがあげられた。

アンケート実施後、現地を訪問して、ユニバーサル対応の担当者(日本各地のアウトドア環境のユニバーサル対応について詳しい)に対して結果報告を行い、ジオパークや自然公園へのユニバーサル施策の導入について意見をうかがった。まず、現在のジオパークや自然公園のビジターセンターはバリアフリーに対応し、多目的トイレなども設置されているため、アウトドア観光の起点になる可能性は高いという指摘がなされた。一方、ビジターセンターに車いすが設置されているケースも多いが、「車いすで回れるコース」などの情報の発信が十分ではないという。比較的安価な補助器具の

JINRIKIなどを導入するとともに、「サポートがあれば車いすで楽しめる」といったカテゴリーのコース概念をつくり発信することで、ビジターセンター周辺の「既存の道路や施設がユニバーサル対応のコースとして利用可能」であることを障がい者や高齢者に可視化できると指摘された。具体的には、「モデルコースとして、多目的トイレ、飲食店などがあるビジターセンターから近距離の周遊コースを設定し、情報発信する」という提案がなされた。合わせて、砂利の有無や斜度の情報の提示、コースの長さは1時間以内で回れること(500mから1000m)を目安にするとよい、車いすで利用するコースは80cmの幅を確保する必要があることなどが提案された。



写真: 天空カート (筆者撮影)

富士見高原では、自動運転で高齢者や障がい者もストレスなく標高の高いエリアまで登ることを可能とする「天空カート」や「創造の森」に設定されているユニバーサル対応のコースを体験した。「創造の森」には多目的トイレや車いす利用者も使いやすい野外のベンチテーブルなどが設置されており、標高1400mからの絶景や森の中に配置された彫刻などを誰もが楽しめるように配慮がなされていた。



写真: 天空カート (筆者撮影)

3.3. ジオパーク全国大会の分科会での議論

2023年8月30日から9月1日第14回日本ジオパーク全国大会が青森県むつ市(下北ジオパークの所在地)で開催された。日本ジオパーク全国大会は、「ジオパークプログラムの理念と取り組みを広く周知するとともに、各ジオパーク地域相互の情報・意見交換を通し、より一層の発展と向上につなげること」を目的として開催されている(日本ジオパーク、2024)。



今回の大会では、学術的発表に加え、ジオパーク発展のために14の分科会での報告がなされた。われわれの研究チームは、ユニバーサルデザインワーキンググループが主催する「ユニバーサルデザインがつなげる多様な人と台地とその心地よい未来」というセッションに参加した。

この分科会セッションでは、座長で兵庫県立大学・山陰ジオパークの松原典孝氏や霧島ジオパークユニバーサルデザインフォーラムの西島昭治氏を中心に、ユニバーサルツーリズムに関心のあるつくば、三笠、南紀熊野、伊豆大島、三陸、栗駒山麓、八峰白神の各ジオパークのスタッフやガイドが参加して行われた。

われわれ(脇田、西尾、岡本)からは、運営サイドのジオパークネットワーク(供給側)への調査と富士見高原での利用者(需要側)の調査の結果について報告し、ビジターセンター周辺の既存の道路や施設を活用した「1パーク1コースキャンペーン」の提案をして参加メンバーと議論した。特別な施設や専門人員の育成・配置にかかるコストはユニバーサル対応の障壁となるが、既にあるビジターセンター周りの道路や木道、舗装された散策コースなどの見直し(砂利など路面の状況、斜度、道幅のチェック)とユニバーサル対応コースへの設定およびウェブサイトへの掲載などは比較的取り組みやすいとの認識は共有され、それらのコース情報の集約をジオパークネットワークで実施する具体的な方法についても議論がなされた。

分科会の後半には、石灰岩の触察体験のワークショップやJINRIKIの運用講習も実施された。

3.4. 学生による秋吉台のユニバーサルデザインに向けた取り組み

研究チームでは、美祢市およびMine秋吉台ジオパークの協力を得て学生も秋吉台でのユニバーサルデザインに関してともに考える機会を設けた。山口大学西尾ゼミでは、秋吉台を事例としたアウトドア観光のユニバーサル対応について調査を実施し、現状の課題をクリアするための具体的な施策について考えることを課

題として取り組み、10月に行われた、スポーツ産業学会主催・スポーツ庁後援の「日本スポーツ政策会議(Sport Policy for Japan: SPJ)」で報告した。

秋の大会前の8月には、西尾ゼミと岡本ゼミが研究交流を行い、脇田氏のガイドと講義を含めた景清洞での車いす体験、秋吉台科学博物館の講義室で研究発表会を実施し、提言案の内容について議論を行った。



写真：秋吉台・秋芳洞での一橋大学とのセッション(筆者撮影)

西尾ゼミの学生による提言は、SPJの審査員からも評価され、「共助マニュアル」を担当した学生チームが「優秀賞」を受賞した。

3.5 秋吉台ジオフェス2024での実践

2024年11月4日(祝日) Mine秋吉台ジオパークで実施された「ジオフェス2024秋祭り」で学生のアイデアの展示および、JINRIKIの講習会を行った。



写真：秋吉台でのJINRIKIの講習会(筆者撮影)

講習会では、霧島ジオパーク・デザインフォーラムの西島氏、川原氏が鹿児島から講師として来場し、JINRIKIの実演講習会を実施した。秋吉台台上の草原では、カルスター（ビジターセンターの名称）から眺望のいい若竹山までの間には、段差の存在が何力所もあり、さらに路上が砂利で覆われているため通常の車いすでは移動ができない。

しかしながら、補助器具のJINRIKIを使うことで、足が不自由な高齢者や肢体障がい者が自然を楽しむことが可能となった。



写真：学生プロジェクトの実践（筆者撮影）

また学生が提案した共助マニュアルとヘルプマークに関しては、配布方法、デザインなど多くのフィードバックを来場者からいただいた。また地元TV局からの取材を受け、関心の高さが伺えた。

3.6 霧島ジオパークでの電動車いすの実践イベント

霧島ジオパークでは、2015年に全国大会を開催して霧島ジオパーク・ユニバーサルデザインフォーラムが結成され、現在まで活動をしている。2024年10月にJINRIKIを使ったパイロットセッションを行い、現地のガイド、市会議員、ジオパーク担当者などで約1kmの車いすが通れるコースを体験して意見交換をした。そこで全国の観光施設に導入をはじめている電動車いすとJINRIKIで運営者、利用者双方から広く意見を聞くために12月に実証実験を行うことになった。

12月16日（月曜日）「霧島ジオパークにおける車いすを使ったツーリズムを考える研修会」を実施した。電動車いすのフォーラムを実施した。当日は、電動車いすWHILLの担当者、販売店である宮崎トヨタ、をはじめNHK宮崎放送局も来場し、ユニバーサルツーリズムの関係者24名（行政関係者8名、観光事業者10名、施設管理者3名、国立公園管理者3名）が参加した。

電動車いす（近距離モビリティ）と車いす補助器具（JINRIKI）の紹介および操作方法の説明の後、約1時間参加者がコースを体験した。通行可能な道路は通常車いすと同じく舗装道路であるが、芝の上なども通行



写真：電動車いすの実践イベントと意見交換会（筆者撮影）

が可能であった。

実地研修終了後は、会議室で参加者がユニバーサルツーリズム（ユニバーサルデザイン）について議論した。議論を通じて明らかになった課題としては、導入するための価格、補助金や観光利用者への料金設定、リスク管理などがある。また、参加したほぼ全員が、電動車いすやJINRIKIの必要性を感じたことも判明した。

4. 今後の展望とまとめ

上記の取り組みから、受け入れサイドと利用者サイドの課題が明らかになった。

今後ジオパークで「1パーク1コースキャンペーン」を展開していくために次の三点が必要な設定となる。第一は、ベースになるビジターセンターにおいて隣接した駐車場が存在し、多目的トイレ（オストメイト対応）が設置されていることが条件となる（必要施設）。

第二には、ビジターセンターから安心して戻ることができるコースの設定である。めどとしては、1時間以内のコース設定である(時間の制約)。

第三は、コースを利用者のカテゴリーによっていくつかのパターンに分けることである(カテゴリー)。

集約するといかのようにカテゴリーで分類できる。

①車いすなどの補助器具なしで高齢者同士が周遊できるコース(パターン1)。

②通常の車いすで介助をして周遊できるコース(パターン2)である。

これらに加えて、電動車いす、JINRIKI、ビーチ車いす、Hippo Campe(水陸両用車いす)を使用して行くコースである。

アウトドア環境におけるユニバーサルデザインの情報を提供できるように今後取り組んでいきたい。

【謝辞】

本実践報告の作成に関して霧島ジオパークの図師聖士氏、霧島ジオパーク・ユニバーサルフォーラムの西島昭治氏、富士見高原リゾートの藤田然氏、日本ジオパークネットワークのユニバーサルデザインワーキンググループ(代表:松原典孝氏)の方々にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

本研究は JSPS 科研費 JP23H03645 補助金 2024 年度 基盤研究(B) の助成を受けたものです。

【引用・参考文献】

西尾建(編) 持続的なスポーツ観光—SDGs による山口県のスポーツ観光、東洋図書出版。

西尾, 橋本, 木寺& 鳴尾.(2022). SDGs による山口県のスポーツ観光講座とユニバーサルツーリズムの実践報告. 山口大学山口学研究センター紀要 「山口学研究」, 2, 10-16.

南日本新聞社 (2025) 障害や年齢問わず楽しみ「ユニバーサルツーリズム」12月22日掲載。

山口弘幸.(2023). 糸魚川ユネスコ世界ジオパークを活用したユニバーサルツーリズム推進の課題の検討。

【参考 URL】

霧島ジオパーク・ユニバーサルデザインフォーラム (2024)

<https://kirishimagp.wixsite.com/udforum/blank-7>

(最終アクセス: 2025年1月12日)

日本ジオパーク (2024) 第14回日本ジオパーク全国大会下北大会。 [https://2024.shimokita-](https://2024.shimokita-geopark.com/workshop/no-09/)

[geopark.com/workshop/no-09/](https://2024.shimokita-geopark.com/workshop/no-09/) (最終アクセス:

2025年1月12日)

富士見高原リゾート (2024) “ユニバーサルフィールド” それは誰もが共に楽しめる場所

<https://fujimikogen-resort.jp/about/universalfield/>

(最終アクセス: 2025年1月12日)

NHK宮崎放送局 (2024) えびの高原で遊歩道を電動車いすなどで巡る体験会を開く

[https://www3.nhk.or.jp/lnews/miyazaki/20241216/506](https://www3.nhk.or.jp/lnews/miyazaki/20241216/5060020017.html)

[0020017.html](https://www3.nhk.or.jp/lnews/miyazaki/20241216/5060020017.html) (最終アクセス: 2025年1月12

日)

UNWTO (2021) 責任ある旅行者になるためのヒント

[https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2021/12/tips-](https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2021/12/tips-for-travellers.pdf)

[for-travellers.pdf](https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2021/12/tips-for-travellers.pdf)

(最終アクセス: 2025年1月12日)